

「国語科」とはどのような教科か

松本 修

清水義範は『はじめてわかる国語』^{*1} に、次のように「国語科」への疑問を端的に述べている。

…国語というのは、どうも何を学ぶんだかよくわからない、輪郭のぼんやりした教科だなあ、というのが私の実感である。(p.13)

清水は、その本の巻頭に書いている通り、愛知教育大学の国語科を出ていて、初等教員免許と中等の国語科の教員免許を持っている。そして小学生を対象とした作文教室をやっている、『清水義範の作文教室』^{*2} という本を書いている。作家が教科としての国語科を得意教科としていたという話はあまり聞かないが、清水の経歴からすれば、いわば「国語科」のインサイダーと見られてもおかしくはない。その清水がこんなことを言っているわけだ。

松本・市川(2008a,2008b)^{*3}の「「国語科」のライフストーリー」の研究においても、インタビューBは次のようなことを言っている。「国語はまあ勉強の仕方が分からない、で(点数が)取れない。」インタビューAも点数はとれるが、「多分俺説明できないよ。正解を。」と述べている。できるにせよできないにせよ、国語とは勉強の仕方のわからない、問題を解いて合っているにも説明できないようなものなのだ。Bは嫌いな教科という自覚をインタビューを通じて「もしかすると好きかもしれない」というように変化させる様子を見せたが、Aは、「本を読むのは好きだ」が、「国語っていう教科になると」好きじゃないと言う。好き嫌いにおいても曖昧なのである。

おそらく、国語科を専門と自任する教師も、国語科教育を専門とする教育学研究者も、「国語科」とはどのような教科か?と問われて即答できる人は少ないだろう。25年以上前に高等学校の教壇に立ったかつての私も、「ことばでことばを考える教科」「ことばを通じて認識(のあり方)を更新する教科」というような定義を用意はしておいたものの、絶対的な確信を持っているわけではなかった。

「国語科」とはどのような教科か?という点について、清水に従いつつ、インタビューの結果を交えて振り返ってみようというのが、このエッセイの趣旨である。

*1 清水義範(2006)『はじめてわかる国語』講談社文庫(原著2002『週刊現代』掲載は2001.11-2002.10)

*2 清水義範(1999)『清水義範の作文教室』早川書房

*3 松本修・市川泰子(2008a)「「国語科」のライフストーリー」『臨床教科教育学会誌』8-1 2008.2 臨床教科教育学会

松本修・市川泰子(2008b)「「国語科」のライフストーリー(2)」未公開

勉強の仕方がわからない

清水は次のように述べている。

たとえば、最近学校で習ったのは、和井内貞行が十和田湖でヒメマスの養殖に成功した話と、『走れメロス』という小説だったとする。それで、市販のテストをやってみたら、『レ・ミゼラブル』の一部分を読んで、その時のジャン・バルジャンの気持を次の五つから選べ、というような問題だったとする。

それをやってみて、はたして明日の試験のための勉強になっているのであろうか。私には、とてもそうは思えなかった。

メロスとジャン・バルジャンでは、人間性も置かれている立場もまるで違うのである。ジャン・バルジャンの気持がわかって、それをメロスにあてはめるわけにはいかない。だったらやってもむだである。と、幼い私は思った。(pp.14-16)

教科の学習の成果は基本的にはテストではかれる。国語、特にその文学教材などにおいては、身につく技能が明確ではなく、テストの問題で問われるのも必ずしも技能中心ではない。そこでは、材料となる文章そのものの内容が問われることになる。もちろん内容を通じて技能も見ることができのだが、それは、この学習材のここで身についたというような自覚を持てるような形にはならない。だから、「やってもむだである」ということになる。

Bは、同じような実感を次のように述べている。

昔は何しろわかんねえなって、俺国語できないなっていう印象しかなかった。ただ成績も5なんだけど(笑)、あの中学なんか、高校なんかもいい成績だったんだけど、点数は取れるんだけど、でもわかんないな。数学とか理科みたいにバシッと自分で納得できる、ふうにはならない。

これをうけて、インタビューアのIは次のように述べている。

あー、成績優秀な人で国語が分からないって人多いですよね。私のまわりの友達でもー、まあ理系だった子なんですけど、だいたい平均もう90何点とかもうすごい満点近い点数をいつもいつもたたき出す子が中学のときいて、で、国語だってそんな悪くないんですけどー、どーしてもなんか分からないっていつもいってて(笑)。そんなに点数取れているのに分からないのかなあって思ったんですけどー。まず何を勉強していいのかがそもそも分からないって。

Bは、小学生の頃は「国語はまあ勉強の仕方が分からない、で(点数が)取れない。」状態であったし、古文漢文はいわば正解の仕方を覚えることで克服し、次いで現代文でも

解法を会得することで克服していった。Aは文学でも点はとれたが、「主人公になりきればいい」「俺の気持ちを書けばいい」というような方法をとっていて、「多分俺説明できないよ。正解を。」ということになる。インタビューのIは、国語が好きな教科であり、その学習は楽しかったが、自分自身では、文学の選択肢問題がどうしても克服できなかった話を繰り返し語っている。

や、なんか。テレビとか見ても、解き方のこつとかやってるじゃん。そのセンター、点のとり方、センターだけのとり方ってあるでしょう？あれを見てやればいいんだろうけど、あれをみたら国語は絶対好きにならないだろうって私は思いながら、見ちゃう、けどお。でも自分でも、どういうところが好きだっていうのがあんまりいえない、かなあとか思いながら。

現代文てわりと物語だったよね。あれ？違ったけ？その物語の感じの中から選んでだっ、私は納得できないとかがあったんだと思う。わかんないけど、取れなくて、現代文の選択肢が全然だめでねー。やったんだよ？たまーに奇跡的によかったのが1回くらい、あとはもう半分くらいしか取れなかった。50点満点だったよね？あれねえ。25点くらいしか取れなかったもん。

うーん、なんか一回先生に聞いて、国語の先生に一。なんかこう教えてもらったんだよ、確か。ここをこう読んでいくとー、こここれ違うよねーみたいに。だからこれになるんだよーって言って。でも納得が全然できなくて、あーそうですかーでも間違いとは思わなかったのね？それはそうかもしれないな、それはあってるなと思う、なんかなんか、「あーそっかー」、とは思わなくて。あーそうですかーみたいな感じで、そのときはそうかと思ったけど、また違う模試解くじゃん。またなんか(笑)間違いいっぱいじゃん。結局分かってないんだなって事に気づき、だめだった。

Iは、「国語は？やっぱり勉強、その仕方が分からないっておっしゃってたのと分かるように私は嫌いじゃなかったんですけど、理由は勉強しなくてよかったからなんですよ(笑)」と言っているように、得意科目であったことも国語が好きな理由の一つであるが、二人のインタビューIが選択肢問題を克服したのに対し、どうしても克服できなかった。それは、とりわけ文学の選択肢問題を克服する方法が、文学を読むことそのものからは遠いからである。簡単に言えば、評価と学習内容が異なっていることに我慢ができなかったのであろう。「センターだけのとり方ってあるでしょう？あれを見てやればいいんだろうけど、あれをみたら国語は絶対好きにならないだろうって私は思いながら、見ちゃう」と言っている通りである。

評価と学習内容が違っていれば、勉強の仕方がわからないのは当然である。逆に言えば出来る子でも、その理由は説明できない。センターのマークの解法のように説明できる解き方は、単なる解き方であって、文学が読めるとか、国語ができるとかいうこととはずれているのである。

教える内容がわからない

清水はまた、次のように述べている。

…三年生ぐらいから、先生が国語の授業で、奇妙なことをきくようになったからである。たとえば、吾一がカッとなって池に石を投げた、というような話を読んで、こう問うのだ。

「吾一はどうして石をなげたんでしょう」

私は、そんなにむずかしいことにどうして答えられるだろう、と思った。それは、ともではないが一言で言えることじゃないぞ、と。

国語という科目がいつの間にか人間学の科目になっているのである。そして、人間の言動の理由を、たった一種類の答で説明できるんだと先生は言うのである。(pp.20-21)

そして、国語の時間にはもうひとついやなことがあった。それは、感想を強要されることである。

ある文章を読んだ場合、大切なのはその内容を正しく理解することである。それをめざしてやっているのが国語の教育なのだ。

中略

ところが授業の中で先生は、読んだ感想をある方向に導こうとするのである。さりげなくやっているが、どうもそうだ。

立派な人ですねえ、と。

努力するってことが大事なのよねえ、と。

それはすごく臭くて、うんざりすることだった。

文章を読んだ感想は個々人のもので、どれかひとつが正解というようなものではないはずである。感想はこうでなければバツ、というような教育はやめてほしい。

ところが、どうも国語は、感想をリードするのである。つまり、思想をリードするのである。

そのことへの違和感が、国語の授業にはつきまっていた。言葉の勉強かと思いきや、陰に道德教育が隠れているのだ。(pp.22-23)

Bは、現代文について次のように述べている。

ただ現代文は、これだと思った答えが一全然違ったりして一なぜこっちかがわからないので一。それなので、それがちょっとつらかったなあと。

そして、吉野弘の詩「夕焼け」をめぐる具体的な体験を語っている。

んとね一、えっそれ中中2？中2か中3だな。2中3かな。あの前にも言ったかもしれないけど、「夕焼け」っていう詩の、とき。

でそんなときもま点数は取れるんだけどー、あの一特にいやだったのが、あの一作者はなぜ、こう、どう思ってるんだらうとかいう。うん、やつで、あの一その主人公の女の子が、最後に席を立たな立たなかった理由を授業でこういうふうに行ったときに、あの一俺が思ったことと先生が違う答えだったんで、あー納得できないなーなんて思ってたね。

この体験については、研究の関係からBに「私の国語学習史」という短い文章を書いてもらったことがあって、その文章の中にも書かれている。

何年生であったか忘れたが。授業で「女の子が席を譲らない理由」について話し合った。私は「周りの雰囲気、自分だけ席を譲るのが恥ずかしくなったからだ」と思った。でも、先生は違う考えを言った。その考えは覚えていない。ただ、自分の考えは否定されたことは覚えている。

はたから見れば、典型的な「正答のない問い」である。ただ、教師は詩の本文を引用しながら文脈に沿った正答（らしきもの）の作り方を教えようとしたか、あるいは、指導書にある正答（かなり多くの教師がそう信じている）に近づけようとしたかであろう。「吾一はどうして石をなげたんでしょう」という問いと同じである。それぞれの答えがどこに着目したのか、今日の国語科授業であればそれこそ交流が行われるのであろうが、不幸にもそうはなっていない。大体、高校入試でも大学入試でも交流は行うすべもない。どれもピンとこない選択肢から選ぶしかないのである。何を教えようとしているのかわからないのも当たり前である。

Bはその後小学校でも中学校でも国語科を教える機会を持つことになるが、それでも基本は変わっていない。

中学校の先生をしたときに、どうしても国語を一クラス教えなくちゃなんないってことがあって、一年間国語教えたんだけど。やっぱ漢字と文法？特にあの一北の国から（とかな）んだけど、あの時はもう困ったね、教えるのに。どう教えたらいいかわかんなくて。おもしろくできないっていう、うん。おもしろくないとやだなっていうのがあって。国語の場合なんか、分かったとかできたとかそういうのがあんまりない気がするんで。そうすると、どうやって教えていけばいいのかなあっていうのがそこでもやっぱり悩んで。

Bは結局、自分が入試問題の解き方を克服したのと似た方法を探し、法則化運動のグループの本を参考に、分析批評を取り入れてより技能に寄った学習指導を行ったことを述べている。逆に言えば、Bは自分が苦労をした内容的な問いを出さないことによって、この問題を解決した（回避した？）とも言える。

いずれにせよ、学習者の側から見れば、思想統制ないし複雑すぎる問題の単純化としか思えないような教育内容がまぎれこみやすいのであり、そのことが理解できないわけである。当然、国語科は何を教える教科なのか、わからないことになる。

漢字の書き取りVS高度な知性

Bは、「国語っていうと、俺イメージ的には漢字書き取りなんだけど（笑）」と述べている。清水も、「国語については、漢字の書き取り練習以外には家で勉強のしようがなかった。」(p.14)と述べている。暗記が嫌いで文法がダメなAも、塾で漢字の書き取りはクリアしていたものと考えられる。(Aは塾で学校よりはるかに進んだ内容を勉強したことが学校との齟齬の一因だったことを明かしている)国語の最も矮小なイメージは「漢字の書き取り」なのである。今でも小学校の宿題の最大の部分を占めるのではないだろうか。指導要領でも明確な基準は学習漢字くらいしかないのだからある意味当然で、漢字が書けるかどうかは誰から見ても明確に判断できるのだから、重要である。

しかし、それだけなのだろうかと言えば、そうではない。もっと本質的なことが「国語」の重要な内容であることに、AもBも言及している。

A：国語好き？

I：うん。国語は好きだよ、本読むの好きだから昔からって。

A：あ、本読むのは好きだよ。

I：うん、あ、でも国語は好きじゃないのね、じゃあ。

A：国語っていう教科になるとね。

I：のは好きじゃない。

I：あ、分かったってなりますよね。確かに国語は、あ、／／分かったっていうのがないですね。んーなんかじっくりほんとに考える世界っていうのは私も思うんですけど。

B：／／分かった、ないよね、あ

んまりねー。

B：国語はじわじわしてる感じがする。／／あまり、あつなるほどってんじゃないくて。じわじわじわじわと。

I：／／あー。

I：でもそれを教える側になったら、そのじわじわもいいなって思いますか？

清水も次のように述べている。

今思えば、数多くの国語のテストをやってみて、採点して、自分が間違えた問題の正解を知ってみる、というのは基礎力をつけるためには有効な学習なのだが、その頃の私にはそれがわかってなかった。頭の中は和井内貞行とメロスでいっぱいなのに、ジャン・バルジャンの話はよせ、という気がした。

そういうわけで、国語については、漢字の書き取り練習以外には家で勉強のしようがなかった。国語については、同じような気持だった人が多いのではないだろうか。

そこが、国語という教科のわかりにくさであり、実は、すごさなのだ。公式があつて、

それが理解できていれば正解が導き出せるとか、情報をすべて暗記していればどんな問いにも答えられるということではない。試されるのは、読解力とか、人間理解力というようなものであって、すごく高度な知性を求められているのである。

だから、いったいどういう勉強をすればいいのかさえ、子供にはわからないのである。国語とは、そういうすごい教科なのだ。(pp.14-16)

AもBもIも清水も、現実の国語科のわかりにくさと本当の国語科の理念と両方を理解しつつ、その分裂に悩んでいると言うと大げさだろうか。しかし彼らの言葉のはしはしから、そのような矛盾と葛藤が感じられる。

国語科とはどういう教科であるべきか

松本・市川の「『国語科』のライフストーリー」の研究は、学習者が具体的に国語科をどのように見ているのかを学習史を振り返る中で確かめようとするものであり、裏側からの「国語科」の検証ともいうべき目的を持っている。

そこに現れたのは、国語科のわかりにくさであり、ある場合には過剰ないし領分を越えた教育内容であった。しかし誰もが国語科の本質を何となくは見て取っていて、その矛盾を抱えて学習史を語っている。それは、清水義範という作家においても同じ事情である。

ここに見られるような矛盾を解消するような学習が国語科の授業において補償されれば、彼らの悩みはなくなるわけである。逆に言えば、国語科はそのような内容を備えるよう再検討されねばならない。しかしそこには困難もある。

清水が『国語入試問題必勝法』^{*1}を書いているように、受験や試験問題というものと期待される「国語」のとの間に軋轢がある。これはよく言われることであるが、国語科教師や国語教育学研究者の立場からはそれほど大きな問題としては意識されてこなかった。試験問題そのもののあり方が改めて問われているのだとも言える。

そしてまた、何よりも国語教育学が、見てきたような疑問に答えられるようなものにならないければならないのだろう。清水はこう言っている。

ただし、そういうすごい学問が、素晴らしい教育法で、すごくうまく指導されているかどうかは別の問題である。本来のねらいがとても高度であるだけに、それに見合うだけの教育法も、指導者も完備されておらず、理想には届かない教育しかされていない、という可能性はある。(p.17)

清水は半ばインサイダーなので、極めて遠慮深くこう言っているが、読点が示すように、「、という可能性はある」はまさに蛇足である。

*1 清水義範(1990)『国語入試問題必勝法』講談社文庫 石原千秋の一連の著作など、このジャンルからの論は、巷間の「国語科」論の中心とも言える。

栃木県の高校入試問題作成に2年携わり、大学入試センター試験の問題作成にも2年携わった身としては、入試問題の批評には首をすくめるしかないが、居直って言えば、選択肢で国語の問題を作れという方が無理である。所詮国語の問題は「出題者の意図を本文を参考にして読み解け」というものだということを世間の先生方が徹底してくれないのを恨みたいという気持ちも少しある。ただどちらの委員の時にも検閲側？には喧嘩ばかり売っていた。そうせざるをえないのである。

そして、国語の理想が実現するような研究も実践も行われていないとする清水の見識には恐れ入るしかない。マージナルな存在だからこそ、清水は鋭い眼を持っている。(もともと素質的にそういうヒトだという気もするが)

この天の眼を意識しつつ、学習者のつらい思いを理解しつつ、国語教育の研究と実践が進められなければならないのだろう。ただ、国語は「試されるのは、読解力とか、人間理解力というようなものであって、すごく高度な知性を求められている」ものなのであるから、どこまでいってもわかりやすいものにはならないだろうなあ、という気もしている。